

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その12

クチャの長い一日と旅の締めくくり

一通りクチャ観光を終えて、午後はホテルでまったりと過ごした。我々は明日の夕刻クチャからウルムチへ飛ぶ飛行機を予約してあるのだが、すでにクチャ観光はあらかた終えた。昨日クチャへ着いた段階で、その飛行機を今日のフライトに変えられないかと交渉してみたのだが、満席で断られた。しかし、すでにクチャに2泊。ウルムチで確認したいこともあるので、もし可能ならば今日ウルムチに向かいたい。ヌルさんが「当たって砕けろです。直接クチャ空港に行ってキャンセル待ちをしましょう。」という。みんなの思いは共通していた。空港でキャンセル待ちをしている間、それまで搭乗者の荷物チェックの様子を見ていた周さんが僕らの荷物を見て渋い顔をしている。ここは滑走路が短くしかも飛行機も小さいので、機内預け荷物は20kg、そして持ち込み荷物は5kgに制限されていて、係員が両方とも重量をきっちり量っているというのだ。僕らは日本から来る時から機内預けは20kgを越えないようにし、できるだけ持ち込みを増やすようにパッキングしていた。重いものを精選して入れてある僕と久根さんの持ち込み荷物は、間違いなく10kg以上ある。これは困ったなあと思っていると、フライト時刻ギリギリになって、最終的に変更ができるのは1人分という連絡があった。それで、ヌルさんだけが先行してウルムチに飛ぶことになったのだが、急遽パッキングをし直して、ヌルさんに重いものを持って行ってもらうことにした。

夜、ウルムチに着いたヌルさんからの連絡によれば、飛行機には10席近くの空席があったという。重量制限の故なのかもしれないが、満席ではなかったと聞いてそれなら乗せてくれてもよかったじゃないかと、ちょっと落胆した。夕食は、今日もまた屋台に出たが、今宵はヌルさんがいないので、漢族の営む屋台へ足を運び、火鍋を囲んだ。暑い中、フウフウ言いながらこれまでと一味違う料理に舌鼓。

8月7日、旅も最終盤、せっかくなので今日はゆっくり足でクチャを楽しもうと、久根さんと二人で街中をブラブラした。夜の屋台街が昼間は一番の繁華街でもあり、ホータンと同じくここにも地下街が整備されていた。スーパーを回ったりして庶民の生活を垣間見る。新疆では、多くのスーパーでは、万引き防止のため、バッグや袋は店内に入る前にロッカーに預けたり（これが大方のシステム）、店に備え付けの袋に入れて封印されたりという方法がとられている。さらに売り場には監視するように大勢の売り子がおり、店から出るときには、係員がレシートチェックをするという念の入れようである。随分せちがらい。新華書店を覗いてみると、村上春樹の「1Q84」が並んでいた。今最も人気のある日本作家が彼だとは知っていたが、正直ここまでというのも驚きだ。周さんと午後は博物館へ行こうということにしてあったのだが、確認したところ改装中ずっと休館中だとのこと。ウルムチ以来、どうも博物館にも縁がない。

ちょっと早いが17:00にクチャ空港に向かう。ここは朝夕1便ずつウルムチから来た飛行機がウルムチに戻る便があるだけだ。したがって、その時間帯以外は閉まって

いる。閉鎖された門の横からはいったが、がらんとした待合には誰もいない。カシュガルからずっと一緒だったドライバーの秦さんとはここでお別れである。9月に新蔵公路を西藏まで抜ける予定があるという彼に、もう一度アクサイ峰の写真を撮ってきてほしい旨改めてお願いする。19:10 チェックイン。周さんに一部荷物を持ってもらい、これまで一度も出番のなかった「登山靴」を履くなど、荷物作りには苦労したが、機内預け荷物は周、大西がドンピシャ20kg、久根さんが20.5kgでオーバーチャージはなし。また、今日は機内持ち込みについてもノーチェック。チェックインしたらすぐにサンダルに履き替えたがこんなことなら最初から登山靴なんて履くんじゃなかった。

我々を乗せた双発のプロペラ機 ATR-72 は21:30にウルムチ到着。ヌルさんが迎えに来てくれた。いよいよ新疆最後の夜。ゆっくり屋台にでも出て飲みたいところだが、今日は最後の大事な仕事が残っている。ヌルさんの知り合いの「阿吾拉力餐厅」で最後のウイグル料理を軽く（といっても料理4品にシシカバブ）食べて、ホテルへ向かった。

最後の仕事は、1999年のセリックラムムスターグの偵察時にお世話になり、今も新疆登山協会にいる藩震宇さんとの会談だ。11:30、ホテルに着くと、彼は先着していた。藩さんは99年には登山協会に入ったばかりだったが、ヌルさんや李新革さんが出てしまった今は登山協会においては実務者で、今回の我々の登山許可に当たっても色々配慮してくれたそうである。藩さんなら地図を持っているとヌルさんから聞いていたので、あらかじめアクサイ峰の場所を知らせ、その地域の地図を持ってきてもらって、それをもとに最後の打ち合わせをしようと思っていたのだ。「大西さん元気ですか。僕は最近あまり山には登っていませんが・・・。」という藩さんに、彼の布袋様のような腹を撫でながら「いつも年賀状をありがとう。それにしても貫禄ついたねえ。」と僕。久闊を叙すのもそこそこに、部屋で地図を広げて話をした。彼のもっていたのは5万分の1の地形図だった。これまで見ていた10万図と比べれば情報量はまるで違う。あわよくば、コピーを、駄目でも写真に収めたいと思っていたのだが、「機密ですから。」とあっさり断られてしまった。それで、持参していた旧ソ連製の10万図、グーグルアースと比較しながら、2時間近く検討した。藩さんが帰ったあと、ヌルさんと最後の打ち合わせと精算。パッキングを終えて寝たのは2:30を回っていた。

8月8日 5:30、ヌルさんが迎えに来てくれる。朝早いのに、空港には周さんも見送りに来てくれた。来年、なんとか本隊を成功させたいが、ともに力のある二人の協力は不可欠だろう。6:30、そんな二人と来夏の再会を誓って別れた。今回のチケットはかなり格安で、そのため往路も石家庄経由だったが、今日は北京で乗り継ぎ、別便で大連まで行くことになっている。北京の空港では外に出ることができず、4時間ほど缶詰。17:30大連着。航空会社の都合で今日中に名古屋への乗り継ぎができないので、今日のホテルは航空会社持ち、空港の真向かいの航空賓館に案内された。大連は初めてだったが、空港から市街までそれほど離れていないのありがたい。夕食は、タクシーで大連の町まで出た。久根さんと二人で最後の晩餐を楽しんだ後は、ロシア風情街をぶらぶらしながら、長かった旅を締めくくった。

8月9日 大連は朝から落雷を伴った大雨。9:30に大連を飛び立ったエアバスは11:30には名古屋に着いた。空港では勝野さんが笑顔で迎えてくれた。こちらの偵察が不首尾に終わったこと、日本は猛暑、松工の開幕戦大敗、県知事が昨夜遅く決まったことなど双方積もる話をしながら、一路松本へ向かった。